a Wandering Life

ゆず胡椒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａ Ｗａｎｄｅｒｉｎｇ Ｌｉｆｅ

【Ｎコード】
Ｎ２２９７ＢＡ

【作者名】
ゆず胡椒

【あらすじ】
根性が武器の「文学少女」な姉と、怖い顔の癖に「心配性」な弟。、眉目秀麗、文武両道――と、色々チートな双子が、蝉時雨とともに現れた不審者によって飛ばされた先は、非日常が溢れる異世界。退屈を何よりも嫌う双子は非日常を思う存分謳歌するつもりだったが、そう全てがうまくいくわけもなく――――

ちょっぴりチート風味な、王道？ファンタジー。

一応グロ注意なので（多少、血や痛い表現があります）、お気をつけ下さい。

1　蝉時雨と双子

「つまんなぁーい！」
「……毎日、退屈だよな」

「夏」という季節を溶かし込んだような色の空。
じりじりと照りつける太陽と騒ぐ蝉時雨を全身に受け止めて歩く男女が一組。

つまらない、とうんざりした顔で言い放った少女は、その綺麗な顔を暑さにゆがませる。
すらりとしていて、女性にしては高い身長のせいか、少女は見る者に中性的な印象を持たせていた。
本人の性格とは違って、控えめな胸も彼女を中性的に見せている。風に遊ばれている黒髪が長くなかったら、五人のうち三人は彼女の性別を疑っただろう。

対して、その少女に同意するような言葉を返した少年は、見た目からして男らしい。
少年というよりは青年に近いのだろうが、暑さに顔をしかめているところに少年の面影を感じさせる。
きりりとした、涼しげであると同時に、怖そうな印象を与える切れ長の目だが、十分に整った顔立ちだった。

二人で歩いているところを見ると恋人どうしに見えないこともないが、二人の関係はそんなに甘くもなければ脆くもない。
生まれた時から今までずっと一緒の生活を送ってきたもう一人の自分ともいうべき存在――つまり、双子である。

この二人は、双子であることの珍しさに加え、「才色兼備」「文武両道」を地でいくような存在だった為に、周りからは常にちやほやされていた。

なおかつ、大企業の社長令嬢、社長令息とくれば、羨みを通り越して畏敬の眼差しで見つめられる。「住む世界が違う人間なんだ」、と。

一般人からしてみれば羨ましい境遇と才能の持ち主である二人だが、二人とも現在の生活に不満を持っていた。

大企業の社長令嬢・令息というだけでも一線引かれる立場である上、人より頭二つ三つは抜けている才能の持ち主だったから、常に周りにくる人間は二人のことを「凄い」「天才」「素晴らしい」と云う目で見てきて――それ以上、近寄ってきてくれはしない。

高校の先生までもが二人に遠慮している。

人より格段上の才を持っているからと妬まれることもあるし、取り入ろうとしてくる奴もいる。

普通の友人になってくれそうな者たちは皆揃って遠慮する為、二人は高校の中でも奇妙な浮き方をしていた。

少女に言わせれば「猫の中にフレンドリーな虎がいた感じ」である。

生まれてからずっと、そんな状況が二人を取り巻いていた為に、二人はたまに「誰も自分達の事を知らない世界に行きたいね」と話すことがあった。

現実逃避なのは理解している。

しかし、つまらないのだ。

バカ話できる友人もいなければ、殴り合いの喧嘩を出来る親友もいない。
仕方がないからと暇潰しに武道や勉学に打ち込むものの、どこか物足りない。

世界が広がらないのだ。

見える世界はいつも二人の視界の中でしか語られない出来事の一欠片でしかなく、すぐに色あせてしまう。

「あー、学校に来たのに、話す友達もいないし」
「先生は腫れ物でも触る対応だし」
「「つまらない」」

流石双子、というべきタイミングで言葉を発した二人は、全く同じ動作でため息をついた。
二人の心とは反対に、天気は晴れやかで暑苦しい。
これ以上憂鬱な気分にさせないでよと少女が街路樹に止まった蝉を睨んだ時。

ぴたりと、蝉時雨がやんだ。
何の音も聞こえなくなる。

しばらくそれに気づかずに歩いていた二人だが、騒音がなくなった事に異和を感じて足を止めた。

空は青い。

――――まるで、時が止まったようだった。

「なーんか、変な感じ」
「こうも急に鳴き止むのも薄気味悪いよな――何かこう、これから起こりそうでさ」
「起こってもまた蝉の大合唱位じゃない？まあ、異世界への扉がうんたらかんたら～だったら面白いけど」

最近流行りの幻想小説の設定を持ってきて、少女が茶化す。
そうだな、と肩をすくめて、少年が歩きだした。

「そう。そういうのって面白いと思うよネ」

歩きだした二人の足は、再び止まる。

くるりと振り向いた二人の目の前には、真っ黒な服に黒いシルクハットを被った男が一人。
暑そうな格好、と姉が呟くのを耳にした少年は、肩にかけていた竹刀ケースに手をのばす。
男はどう贔屓目に見ても怪しさ満点だ。

シルクハットの鍔に目元が隠されていたが、口元が弧を描いているところを見ると、この男、笑っている。

「つまらなさそうな顔してるネー」

二人は口を開かない。

少女は竹刀ケースに手をかけた弟をちらりと視界に入れ、ポケットに手をのばす。

目の前で笑っている男は、どう見てもおかしかった。
夏なのに黒ずくめなのは良い。服装は人の好みだ。
丈の長いコートを着ているのに汗一つかいていないのも、今は良い。
――――問題なのは、男が地に足をつけていないこと。
要するに、「宙に浮いていたこと」だ。
「そんなキミ達にボクからプレゼント。欲しいよネー？」
双子は言葉を返さない。
「あれ、無反応？ま、良いや」
男は気の抜けた笑みを浮かべ、シルクハットを少し持ち上げて顔をよく見えるようにした。
紫色の奇妙なアイメイクが露わになる。
道化師のような笑みに、道化師のようなメイク。
さらに警戒した双子を知ってか知らずか、男はこう続けた。
「ボクの暇潰しにつきあってくれたら、異世界に招待するよー？」
蝉時雨はまだ、戻らない。
凍り付いたような時間の中、太陽の熱と男の異質さだけがいやにくっきりとしている。
最初に口を開いたのは少女の方だった。

「悠斗、いこ」

制服のワイシャツを引っ張って、少女はこの場から離れることを表明した。

少年の方もそれには賛成らしく、少女の提案通りに男に背を向けようとする。

しかし。

「高月凛音、高月悠斗。キミ達は人並み外れた才能を持ちながら、それを持て余し、その才能が原因で退屈な生活を送ってきた。ボクはキミ達に世界を見せたいと思う。楽しい楽しい、世界をネ」

急に告げられた名前に、少女も少年も動けなくなる。

本能が警戒音を発していた。太陽の熱なんて、今やもう感じられはしない。

男の笑顔が驚くべき早さで二人の心臓を締め付ける。

「ま、つまりは、“拒否されても連れていく”、ってことなんだけどー」

ぱちん、と男の指が鳴る。その音に弾かれたように走り出した、二人の足元のアスファルトが、砂糖菓子のように崩れていく。

崩れたところからは、男の服のような黒が覗いていた。

「イかれた帽子屋（マッドハッター）はアリスで十分！」

「そんなこと言ってる場合か！逃げるぞ！」

走る二人を笑顔で見つめ、男は広がる黒の中心に浮いている。

「でもね、悠斗、多分これ、逃げらんないわよ」
「だな」

足元に迫る黒に一瞬身を竦めた二人は意を決したように後ろを振り向くと、辛うじて残っていた地面を強く踏みつけた。

「落とされるより落ちた方がマシ――ってか、凛音」
「よくお分かりで」
「ほんと、生まれてくる性別間違えたんじゃね？漢らしくてびっくりだよ」
「余計なお世話！」

二人揃って飛び上がると、綺麗な弧を描いて身を投げる。
足から順に引き込まれていく感覚に二人は目を少し見開いた。

そこには何の感覚もない。
沈み込む体を引き寄せあって、二人はぎゅっと目を瞑った。

「…あの子以来だネ、こんなに面白そうな人間は」

黒に二人が完全に沈んだところで、男は再び指を鳴らす。

黒は瞬時にかき消えて、蝉が再び騒ぎ始めた。
日当たりの良い大通りには元通り時間が流れ始め、男の姿もそこにない。
アスファルトは元通り熱にさらされて揺らめいているし、空は青いままだった。

先程までと違うのは、人が二人消えたことだけ。

＊

真っ黒な空間の中でも、妙に二人は冷静だった。
ただの兄弟や一人っ子には分からない感覚かもしれないが、二人でいるだけで随分と落ち着くものだ。
怖いことも不安なことも二人でなら乗り越えられる、そんな気分になれる。
だから、

「暇潰しで異世界に招待、なんて、止めて欲しいわよねぇ」
「ぶっとんだ格好してるだけあったよな」
「大体真夏に黒ずくめって、神経疑うわぁ。暑いじゃないの」
「暑さに頭沸いてる奴かと思ったけど、沸いてたのは元からだろうな」

こんな状況でも軽口をぽんぽん叩けた。

普通ならば戸惑うか喜ぶか、或いは絶望するか。
少なくとも、一般的な反応とは大きくかけ離れている。
――――もし双子がそれを聞いたなら、「こんな体験をさせておいて『一般的』も何もない」と言っただろう。

しかし何もない暗闇だなと少年が呆れたように呟けば、少女の方も同意する。

「気が利かないわよねぇ。招待、っていうより拉致に近いし」

もう少し面白い空間に放り出されたかったんだけど、と言った少女に反応するように、周りの空間が変わり始めた。

『注文が多いネー』

男の声が響いて、暗闇の空間は、“ただの暗闇”からどこかの家のような空間に変わり、薄暗い部屋の様相になる。

少し汚い部屋の中置かれている、モヒカン頭にピエロ服の引きつった笑みを浮かべたマネキンが不気味な滑稽さを醸し出していた。

『ボクのこともボロクソだし』

声だけ響いていたが、男はそのマネキンの隣にひょっこりと姿を現した。

双子揃って渋い顔を男に向ける。

「異世界とかいってたけどただの汚い部屋じゃない」

「あのマネキンは趣味を疑うな」

「違うよー？面白い空間が良いって言うからちょっと衣替え？しただけ」

「つまり貴方が面白いと思う空間がこの部屋、ってこと？更に趣味を疑うわねぇ」

少女の目付きはもはや、変質者を見るそれである。

少年の方はまだ優しい目付きだった。小指の先程度だが。

「……ボク、こんなに否定されたの初めてなんだけど……」

「あぁら奇遇。私だって変人に拉致されたのって初めてだわ」

少女の視線は冷えきっている。

男の方はというと、言葉の割にはどこか嬉しそうだ。

もしかしたら全ての苦痛を快楽に変換してしまう人種なのかもしれない、と少年は思った。いわゆる被虐趣味（マゾヒスト）、というやつだ。

このまま話を続けても特に進みそうにないと判断したらしい少年は、仕切り直すように声をあげる。

「で、あんたは何しに現れたんだ？」

少女にちくちく暴言を言われながらも楽しそう――もとい、嬉しそうな男は、今気づいた、と言った風に話し始めた。

「いきなり飛ばすんじゃ、流石にかわいそうかと思って。オマケしに来たんだよネー」

「おまけ？」

「そ。オマケ内容は言わないけど」

首を傾げた少年に、男はぱちんとウィンクをきめた。

間を入れることなく、少女が「気持ち悪いわねぇ」と引いた顔をする。

今度こそ男がしょぼくれた。

女子高生はかくも残酷で正直な生き物なのだ。

「中身を教えないなら来る意味無いんじゃない？」

姉の言葉は尤もだと少年も頷く。

対して、男の方は悪戯っぽい笑みを浮かべ、立てた人差し指を左右に振って見せた。

「オマケしたよ、って言わなきゃキミ達、感謝しなさそうだからネー」

「それを聞いて感謝する気は起きなくなったな」

「感謝って求めるものじゃないしねぇ……」

そもそも拉致してきたところからして感謝も何もない、と双子は口を揃えた。
男は「可愛くないネー」と笑うとぱちんと指を鳴らす。
「もーちょっと話したかったけど、それじゃ連れてきた意味ないしネ。じゃ、行っておいで」
二人が言葉を発するよりも早く、視界が再び黒に覆われる。
二回目の暗闇に二人はもう一度目を瞑る。期待と興味こそあれど、不思議なほどに恐怖や不安がない。
隣にいるもう一人の自分とも言うべき存在を感じながら、二人は穏やかに意識を失った。

1　蝉時雨と双子（後書き）

誤字、脱字の連絡お待ちしております。読んでくださってありがとうございました。

2　黒衣の騎士と双子

「……今度は普通の部屋？」
「ファンタジーにありそうな部屋だよな」

どちらともなく目を覚ました二人は、自分達が倒れ込んでいた部屋の中をきょろきょろと見渡す。
硬かった地面は、何か柔らかなもの――絨毯に変わっていた。
燕脂色の絨毯は毛足が長く、二人の革靴をすっぽりと受け止めてしまうほどだ。

「今度は本当っぽいわねぇ」
「ガチっぽいな」

夏休み中の全校登校日の帰りに異世界へ連れて行かれる、だなんて思ってもみない出来事。
沈み込む足元の感触、ひんやりした空気が現実感を持たせる。

広々とした部屋の中には、装飾の施された、落ち着いた色合いの一人がけの椅子が一つ、二人が倒れていた向こう側に見える。
その椅子は今立っているところより少し高い場所に置いてあり、椅子の向こうには薄紫色の、人の三倍はありそうな大きな水晶が煌めいている。

簡単に現すならばそれはまるで――

「ＲＰＧゲームの謁見の間、って感じね」

ひんやりした中にどこか歴史を感じるような匂いが混じっている

な、と少女は空気を吸い込んだ。
尤も、それを弟の悠斗に表現させれば「埃と黴のにおいを薄めた感じ」になるわけだが。

「ま、『誇り』と『華美』は感じるけどねぇ」
「？」

薄暗くなかったら大層豪華なのであろう部屋を見て、ちょっとした言葉遊びに興じた凛音。
それに悠斗は首を傾げ、凛音はちょっと笑って手を振った。何でもない、と。

「とにかく出ましょうか。何か扉もあるみたいだし」

それもそうだと二人して持っていた荷物を持ち直し（荷物も異世界送りにされたようだ）、二人は立ち上がる。

途端に、扉が勢い良く開いた。

うわ、と悠斗は声を上げる。
開いた扉から差し込む光が目に痛い。

「お前、どこから入った！」

開いた扉の前に立ち、男が声を張り上げる。
逆光のせいで顔や体付きは不鮮明だが、声からして男だ。

「ここは立ち入り禁止区域だ！」

知らねーよ、と悠斗は言いたい。意図的に入った訳じゃないのだ

から。
つかつかと部屋に入るなり睨みつけるその男に、悠斗は舌打ちを一つ。
腰のベルトに鞘が見える。
ここがファンタジーなら間違いなくこの男は近衛兵か騎士辺りだろう。
この部屋の豪華さからしてそれはある一定の真実味を悠斗に持たせた。
そしてそれが事実ならば、捕らえられて牢獄行き、最悪のパターンで処刑、といったところだろう。
それならば捕まるわけにはいかない。
肩にかけなおしたばかりの竹刀ケースから竹刀を取り出し、悠斗は構える。
真剣を携えた兵士に対して、竹刀でどこまで持つかが心配だが、自分は相手を倒す必要はない。
出来るだけ時間を取って隙を多く作れば良いのだ。
「やはり賊か？」
懐疑的な男の顔目掛けて竹刀を振り下ろす。
どこかでカチカチと音がした。
男に避けられる前に竹刀を引き、足払いを掛けるべく竹刀を斜めに膝に向かって振る。
風切り音の大きさが、悠斗の振りの大きさを表している。
男は飛んでそれをかわすと、悠斗を距離をあけ、腰の鞘に手をの

ばした。

「なかなか出来るようだが、大振りだな」

隙が多いと呟く男の後ろから、白くてほっそりした手が伸びる。

その手の持ち主は男の首元に刃を出したカッターを突きつけると、ひっそりと囁いた。

「隙、ねぇ？」

「もう一人いたのか」

男ににんまりと笑いかけたのは凛音だ。

彼女は耳が良い。

男が部屋に入ってくる前に薄暗い部屋の片隅に潜み、息を殺し、部屋に入ってくる者の不意を討とうとしていたのだ。

不意討ちは性別上不利に立たされてしまう凛音の得意分野でもあるし、確実に仕留めるには都合の良い方法だ。

悠斗もそれを理解していたから、わざと竹刀を取り出して構えた。

相手の視線を、ひきつけるために。

さっきのカチカチという音は、凛音がカッターの刃を引き出した音。

悠斗の大振りな竹刀の振りは、風切り音によってその音をごまかすための行動だ。

何故凛音がカッターを都合よく持っていたかといえば。

手先が器用で工作を好む彼女は、制服のポケットにカッターを入

れて持ち歩く癖があった。
そのカッターは時として護身用の武器ともなる。
大企業の社長令嬢ともなると、誘拐犯から引く手数多だ。彼女が用心するのも無理はない。
彼女の不意討ちもそこから生まれた自衛策。

「武器、捨ててくれません？」

首元に銀色の刃を突きつけた凛音に、男は寧ろ不敵に笑った。

「そんな物で俺を退かせようとは恐れ入る」

首元に近づけられた刃など意にも介さず、男は自らの手を後ろに伸ばし、凛音の腕を掴んで捻り上げる。

「痛ったぁっ」
「忍耐はあるみたいだな」

捻り上げてもなおカッターを手放そうとはしなかった凛音をそう評し、男は腕を掴んでいる手に力を込めた。
ミシミシと嫌な音がするが、凛音は歯を食いしばって男の背に蹴りを入れる。

「凛音っ」

竹刀を放り投げ、確実に男の顔を狙って繰り出した悠斗の拳は、男の顔に当たる寸前でガラス質の壁のような物に遮られた。

「話は後でゆっくり聞かせて貰おう」

男がそう言った瞬間に、二人の体に黒い縄がまとわりついた。
凛音と悠斗をそれぞれ片手で抱え、男は部屋を出ていく。
なおも抵抗し続ける二人に舌打ちをした男は、何事かをはっきりと呟く。それを意識するか否かの瞬間に、二人の思考には靄がかかる。
何も考えられなくなって大人しくなった二人に冷たい視線を向けると、男は冷たい石廊に靴音を響かせ、この国の『王』とも呼ぶべき存在に、二人の処遇をどうするべきか問いに行った。

＊

「質問に答えろ。真面目にだ！」
「答えましたって」
「俺達の方が信じられないくらいだっつの」

菫色の美しい眼を限界までつり上げ、黒衣の男は双子に辛抱強く答えを求めた。
対する双子は半ばうんざりとしながら、通算八回目の男の質問に答える。

「……どうやって入ったと聞いている」
「だーかーらぁ！『帰宅途中に変人に声をかけられたらいつの間にかあの場にいた』の！」

凛音の説明も最初こそ丁寧だったが、八回目ともなると粗雑になってくる。
そりゃあそうなるよな、と悠斗も疲れた顔をする。
何をされたんだかは分からないが、自分の攻撃は確かに防がれた

し、ここにくるまでに行動はおろか思考の自由まで奪われた。
おかげでいまいち現状の確認が取れていない。
それなのにほぼいきなりの状態で、ああいう応酬を交わせる姉が羨ましい。度胸は前からあったが、命の危機かもしれない状況でここまで吠えるとは。

「ああもう！埒があかないわ！」

うんざりした調子で凛音がため息をついた。長い睫に縁取られた目をきりりとつり上げる。

「話の分かる責任者を呼んでらっしゃい」
「……あのなあ、クレーム入れてる訳じゃないんだぞ」

危機感をどこかにおいてきたような、少しずれた言葉に悠斗の危機感も殺がれてしまう。

「そうは言ってもこの人、頭堅いんだもの。話の分からない人に話しても無駄でしょ？」
「そうだけどさ……」
「良い？『異世界から来ました』なんて普通言わないよな、って思われるのはしかたないと思うわ。でもねぇ、『服装がおかしい』『持ち物に解読不可能な言語が混じっている』、の条件を提示された上でもそれを信じないのって、頭が堅いかバカのどっちかよ？」

確かに、二人が連れてこられてすぐに持ち物検査をされた。
夏休みの登校日にこっちに来ただけあって、荷物は限りなく少なかったのだが、それでも筆箱やプリントの束、ノートなどは入っているわけで。
文学少女を自称する凛音の鞄からは文庫本が三冊ほど。

中をペラペラとめくった男が、「どこの言語だ？」と聞いたのは事実だ。
その前にも、「見かけない服装だな」と男は二人を怪訝な顔で見ている。

「でも、常識的に考えたらあり得ないことではあるし」
「『常識ではありえないことがあったから』こうなっているんじゃなくて？そうなった以上、常識の元に話を続けるのなんてナンセンスよ」

二人の言い争いに眉を顰め、男が制止をかける。
その顔には色濃く困惑と疲労が現れていて、双子も大人しく口を噤んだ。

「……お前達の話はまあ、何となくだが理解はした。信じられそうにないが」
「俺達だって信じられないって」
「理解したのが驚きだわ」

あっさりとそう言い放った凛音は、どこか拗ねているようにも見える。
何かあったのかと悠斗は考えて、すぐに思い至った。後ろ手に縛られた姉の左手首は、人の手形の形に赤黒く変色している。
嫌な音がしていたから、もしかすると骨にヒビ位は入ったのかもしれない。

手先を使うことに喜びを見いだす姉からしたら、拘束より酷い仕打ち、というものだろう。

「手ぇ、酷い色してんな」
「嘘ぉ」
凛音が不意に泣きそうな声を出す。
男が目に見えて慌てた顔をした。
必死に取り繕っているが、表情を読むのに長けている悠斗からすれば丸分かりだ。
どうやらこの男、女に弱いらしい。
とは言っても、いわゆる「色仕掛け」に弱いタイプではなく、女性に力を行使できないタイプ、という意味での「弱い」だ。
「凄く腫れてるってか、色がグロい」
「ええ……どうしよう、私手が使えなくなったら死ぬ。死ななくても自死する」
手が使えなくなったら生きている意味なんて見いだせない、と俯いて啜り泣きをし始めた凛音に、悪かったと男が慌てる。
ぐすぐすと泣いたままの凛音にどう声をかけるべきなのかと戸惑っている男を後目に、悠斗は案外チョロいもんだな、と冷めた目でそれを見ていた。
凛音の涙の９５％はいわゆる「女の武器」だ。
悠斗の知る限りの凛音は、「左手がなくても右手で頑張る」の考え方で、「両腕なくしたら口使って頑張るわ」と言うタイプの人間だ。断言できる。
気づけば良いな、と言う程度で手の色を指摘したのだが、凛音はうまくそれを活用した。

涙声は思わず悠斗もビビる完成度。

おそらく、凛音も薄々「この男は女の涙に弱そう」と気付いていて、とっさに演技したのだろう。

（こんなんでよく騎士なんて務まるよな）

逆に心配してしまう。

悠斗の眼前では、凛音が完全に男を騙しきっていた。

女ってホント怖い。涙には騙されないようにしようと悠斗は誓う。

「お待たせしました」

部屋の扉が開いて、双子と同年代か少し上くらいの少女が入ってくる。

入ってきてすぐに、少女は困った顔をした。

「ヴェインさん、泣かせるのは良くないと思います」

涼やかで聞き取りやすい声だ。

薄氷色の眼を困ったように細め、少女は三人に近づく。

紺色のふんわりしたワンピースがふわりと揺れる。

こつこつと黒い編み上げのブーツを動かす度に、彼女の背中で豊かな髪が跳ねた。背中の中程までの長さのそれは一見黒く見えるが、光が当たると紺色に色を変える。

さらさらと髪の流れる音が聞こえるまでの距離になると、彼女からふんわりとした花の香りが漂っているのに気がついた。

「『約束の間』にいた方達？」
「はい」
「どうやって入ったのかは？」
「……信じられない話かと」
「そうですか？うーん、とにかく、ちょっと呪文を解いて下さい」

柔らかく微笑んで、少女は凛音の手首を指した。
しかし、と言ってから、諦めたように頷いた男は、手を宙で横に薙ぐ。

あっと言う間に消え去った黒い縄を見て「助かります」と少女は微笑むと、凛音の左手首を優しく自らの手のひらに乗せる。
黒くさらりとした生地の手袋に包まれた手に凛音は探るような目を向ける。

「ごめんなさい。ヴェインさん、力が強くて仕事熱心なだけなの」

凛音の手が乗っていない方の手で、少女はくるくると円を描くように手首をなぞる。
青白い光がパラパラと舞って、凛音の手首は元通りの白さを取り戻した。

「凄い…」

思わず凛音が呟く。それに可愛らしくありがとう、とはにかんだ少女に、凛音も丁寧に礼を述べた。

「どうしてあの場にいたのか、教えて貰えますか？」

ちょっと申し分けなさそうな少女に、凛音が頷いて丁寧に話し始

める。

帰宅途中で黒ずくめにシルクハットの変な男にあったこと。
『異世界に招待する』と言われたこと。
暗闇に飲み込まれ、気がついたらあの場にいたこと。

子細取りこぼしのない説明は、男に最初していたものと同じだ。

顔をしかめて「真面目に答えるように」と告げた男と違い、少女の方は真剣な面持ちで二人を見つめた。

「何一つとして嘘でないです」
「本当ですか」

呟かれた言葉は男に向けられたものらしく、男はすぐに顔色を変えて二人を見ると、悠斗を縛っていた縄を消した。

「手荒な真似をした。申し訳ない」
「いや、あんたの仕事なんだろ」

仕方ない事だと悠斗も凛音も口にする。理解して信じてもらえばそれで良いのだから。
それより、その人の話を簡単に信じたことの方が私は気になるかな、と、凛音は男に目を向けた。

「この方は、嘘を見抜く能力があるんだ」
「そうなの？便利ねぇ」

悠斗からしてみればびっくりするような言葉だったのに、凛音はそれが当たり前かのようにさらりと納得してしまったらしい。また

は「そんな事あるわけないじゃない」と疑っているから、適当に流しているのか。

「昨日の夕飯、カレーだったんだ」「ふーん」という会話くらいの軽さ。

もう少し衝撃を受けても良いんじゃないのか。

「凛音は「嘘を見抜く」とか簡単に納得出来んのか」

「え？だってほら、事態は私たちにとって良い方向に向いてる訳だし？ここで否定するのもなんか変じゃない？」

確かに、「嘘をついていない」と言う主張は事実であると証明されている。それでも悠斗が少し気後れてしまうのは、やはり「頭が堅い」のか。

「常識…『私たちの世界での』常識はここじゃ通用しなさそうだし。異世界に飛ばされた時点で『ああそういうもんなのね』って納得するものじゃないの？異世界に飛ばされることよりかは『嘘が見抜けます』の方がまだ信じやすいし」

「常識……常識なぁ……凛音はあっちでも常識知らずだったのにそんなこと言うとはな」

「失礼ねぇ、常識は身につけてたわよ？ただ、縛られるつもりがなかったってだけ」

それはそれでどうなんだ。

二人の会話に耳を傾けていた少女と男も、今や何とも言えない顔で二人を見比べている。

元通りの白さを取り戻した手首をしげしげと見つめて、「医者要

らずねぇ」と呟く凛音は、完全に吹っ切れたようだった。
声に感心は混じっていても、畏怖や驚愕はない。

2　黒衣の騎士と双子（後書き）

誤字・脱字の報告、お待ちしております。読んでくださってありがとうございました。

3　少女と双子

「とりあえず、場所を移動しましょう」

床に座ったままの状態では体も冷えますから、と少女が凛音の手をとる。

ありがとう、と立ち上がった凛音に、少女は少し驚いたような視線を向ける。

「背が高いのですね」

「まぁ、女って言うカテゴリの中だと大きいかしら」

「羨ましい」

尊敬というか羨望の眼差しで少女は凛音を見つめている。

「私は背が小さいほうが女の子っぽくって好きなのよねぇ」

「でも、背が高いほうが絶対カッコイイですよ」

少女の背は、凛音と頭一つは違う。騎士のほうと比べれば、少女は騎士の鎖骨くらいまでの背しかなかった。

その傍ら、悠斗は男に腕を引かれて立ち上がっていた。

すまなかった、と再度の謝罪に悠斗は手を振る。

「仕事なら仕方ない。別に怪我させられたわけじゃないし」

「しかし、君の連れに……その、取り返しのつかないことをしてしまった」

ああ、と悠斗は考える。
この黒衣の男性は思ったより真面目で、責任を感じるタイプらしい。

手が動かなくなったら云々の凛音の嘘を信じきっている。
侵入者には容赦無いだけで、普段はもの凄く良い人なんだろうと悠斗は思った。

「あー、言いにくいんだけど、あれはほら、ただの演技なんだ」
「何だと！」

男の顔が驚きに染まっている。
部屋を出ていこうとしていた女性二人も振り返った。

「俺達が言う事じゃないけど、なんて言うか、女の涙には気をつけるべき」
「……分かってはいるんだが」

どうも苦手なのだと、先ほどより少し表情を穏やかにして男は言葉を返した。

「泣かれるとどうしていいか分からない」
「あー、まぁ」

悠斗だってその気持ちはよく理解できた。
今でこそ確信を持って嘘だと判別できるが、それでも凛音が泣くと心配というか、どうして良いのか分からなくなる。嘘泣きというのは恐ろしい。

「ヴェインさん、行きますよー？」

「悠斗も」

ほらほらと手招く女性陣に今行く、と返して男も悠斗も部屋から出た。

出たところで驚く。

「長い廊下だな」

「長いのはここだけだ」

気持ちよく走っても終わりが見えなさそうな長い廊下は、全て白い石で作られている。

そのせいで窓から入り込む光を照り返し合って、まるで光っているようだった。

眩しい、と呟けば、すぐに馴れる、と簡潔な答え。黒衣の騎士だ。

「これから、少し歩きます」

「ここってお城なの？」

歩くことには特に興味を示さない凛音が、隣にいた少女に問いかける。

廊下が余りに広いし、他に通る人もいないからと四人は横並びで歩いていた。

真ん中に女性二人、脇を悠斗と男で固める感じだ。凛音の隣には悠斗、少女の隣には男。

「いえ。塔ですよ。『約束の塔』と呼ばれています」

どうせですから、少し話でもしながら歩きましょうか。

柔らかな笑みを浮かべて、少女はゆったりと石廊を歩く。こつこつと四人分の足音が反響しては光に吸い込まれていった。

少女の横顔は光に照らされてぼんやりとしていたが、神秘的で美しい。

銀色の靄のようなものが見えた気がして、悠斗は思わず目をこする。

少女は長い歴史の流れを感じさせる声で、紡ぐ。

この国は千年ほど前に出来た国らしい。しかし、世界規模で見るとまだ若い国なのだそうだ。

この国を創った者は、ある一つの願いを込めてこの国に名をつけた。

「――＜エリュシオン＞。この世に生けるもの全ての理想郷であってほしい、と彼女はこの名に、約束をした。それ故、この国は＜約束の国＞とも呼ばれている」

いつの間にか、話し手が少女から騎士に変わっていた。

楽園の名にかけてこの国を楽園、理想郷にすると、建国者は誓ったのだという。

その建国者は膨大な魔力で国を発展させていった。

人も、魔女も、悪魔も、半魔も、全てが苦しむことのない世界を創ることを目指して。

「悪魔？」

凛音の呟きを拾った騎士が、ああ、と納得したような声を上げた。

「そうか、君たちの世界に私達のような存在はいないのか」
「――『私達』？」
今度は悠斗だ。
少女が軽やかに笑っている。　騎士の方も、どこか楽しそうな声で、「ああ」と悠斗に返した。
「申し遅れたな。私はヴェイン・クラリック」
――こちらでいう、『悪魔』だ。
今度は凛音も驚いた。
騎士――ヴェインの顔をしげしげと見つめている。
「私程度に驚いていたら心臓が持たないぞ？」
ヴェインはそう言うと、ニヤリと笑って隣にいた少女に視線を送る。
少女ははにかみながら、それでも誇らしげにこう伝えた。
その時の衝撃は多分、一生味わえないのかもしれないと、双子は後に語る。
「リリー・ナトウィックと申します。悪魔ではなく魔女ですが――この国を、創りました」
目を見開いたのは仕方がないだろう。
この国が出来たのは千年前で、でも目の前のリリーは双子と対し

て変わらない見た目で、魔女で、膨大な魔力で国を発展させた――

「「建国者！？」」

双子は顔を見合わせてしまう。

こんなことをいうのは失礼かもしれないが、彼女に親しみは感じても、威厳や威圧感はない。

建国者なんて、嘘だろうと思う。

「あらー。どうしましょ、さっきから無礼な態度取りまくりだわ」

知った今でもその態度なら、その言葉に意味や意志なんてないんじゃないかと悠斗は思った。

或いは呆然としているだけなのか。

しかし、彼の姉は本当に驚いても次の瞬間には「あら、そうなの」で終わらせてしまうことが出来るほど適応力が高い。

つまり、本当に無礼と思っているかどうかは、彼女にしか分からない。

「無礼を働いたのはこちらです。まさか、異世界の方とは知らず」

「いいえ。本当に無礼なのは私達を飛ばしたあのイかれた帽子（マッドハッター）ですから」

一応、目上の者だと判断はしたらしい。

悠斗は胸をなでおろした。折角解放されても、不敬罪でまた捕まるなんてごめんだ。

「……私、貴女の言葉遣いが面白くて好きなんですけど」

「敬語抜きでってこと？」

早速敬語を使った凛音に、リリーがちょっと寂しそうな顔をした。あっさりと砕けた調子に戻れば、リリーはほにゃっと笑って頷く。

「貴女からすれば、私はただの異世界人でしょうし」

「うーん、正直なところ『親切な異世界の人』って感じよねぇ」

正直すぎる言葉に悠斗は一瞬肝を冷やしたが、リリーは笑っただけだった。

「話戻しちゃうけど、そっちのヴェインさんは悪魔なんでしょ？」

「ああ」

「悪魔って、私達の世界だと良くない印象があるの。こっちの世界だとどうなるの？」

『悪い』を『良くない』に変えたことくらいしか気を使っていない問いだが、ヴェインの気をとがめはしなかったらしい。

彼はそうだな、と一拍置いてから話し始める。

「はっきり言って悪だ」

そうでなければ“悪”魔等とは呼ばれないだろうとヴェインは言葉を切る。

凛音や悠斗のどうとも変わらない表情に興味深い目を向けてから、しかしだな、と彼は言葉を続けた。

「何にでも例外はある。私達はそもそも、“生まれながらに魔を使える種族”だった。それなのに悪魔と呼ばれるようになったのは、

私達の種族が魔を持たぬ人間を蔑視し、人を人扱いしなくなったからだ」
「差別してるってこと？」
「そうだ。魔を持たぬものは虫けら同然と言っていた奴もいる。……しかし、私はそうは思わない。彼らには魔はなくとも器用さや技能がある。そうでなくとも元は同じ生命だ。彼らは我らの良き友人であり、その命が軽いことなどあってはならない」

幸いなことに悪魔の中でもそういう考えを持つものは少数ながらいるのだという。

「ここは、魔を持つ者も持たぬ者も、助け合って暮らしていこうと誓った国だ」
「凄いところね」

凛音が素直に感心の言葉を紡ぐ。
悠斗も気になったことを聞いてみた。

「じゃあ、悪魔と魔女は何が違うんだ？」
「魔女は後天的に魔を使えるようになった、人のこと。……ただ、悪魔より人を嫌う傾向が強いので、あまりこの国にはいないのです」

3　少女と双子（後書き）

誤字脱字の報告お待ちしています。読んでくださってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2297ba/

a Wandering Life

2012年1月6日19時46分発行